

平成6年 お伊勢さん125社めぐり（12回シリーズ）
3回 小俣めぐり [約8キロ]

3月 小模の、 「ヨ一ズ」

[約 8 千口]

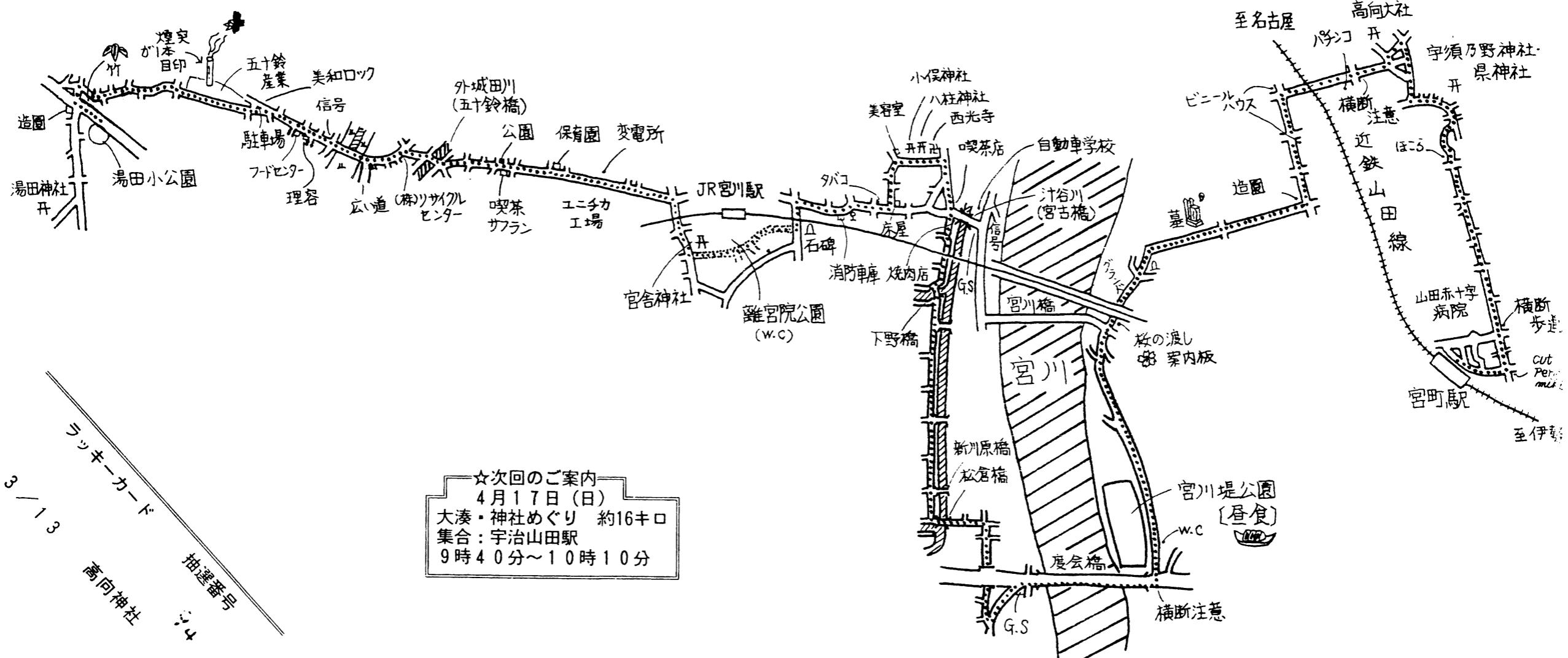
3月 小櫻

伊勢市駅→湯田駅停 湯田神社 離宮院阨 小俣神社

桜の渡し 高向神社 宇須乃野神社 宮町駅

	伊勢方面	松阪方面
12時	36 54	34 51
13時	15 36 54	10 34 5
14時	15 36 44	10 34 5

スタンプ
押し場所
1人1冊で!



小俣・離宮院めぐり

1994・3・13 資料

湯田神社

皇大神宮摂社

社名は延暦儀式帳及び延喜大神宮式に湯田社とある。

小俣町湯田にあり、湯田郷といわれたところ。湯田という名は「齋田（サト）」という意味である。大神宮の御齋田あるいは御神田の土地を指したものである。この湯田郷は、隣の城田郷と同じく、大神宮奉仕の荒木田氏によって開墾された土地である。

荒木田氏が皇大神宮の神主であった関係上この地方の神社は、いずれも皇大神宮の管轄に属し、その摂社末社になっている。

祭神は、大歳御祖命（おとしおやのみこと）と鳴震雷神で、湯田野の農耕守護の大神を奉祭したものである。

儀式帳によると、雄略天皇の頃の創立といわれているが、室町時代には社殿社地とも荒廃し、江戸時代寛文3年（1663）に大宮司大中臣精長によって再興された。

（資料、小俣町史。神宮摂末社巡拝・猿田彦神社）ほか

離宮院跡

離宮院は当初、外宮近くの伊勢市宮後月夜見宮付近の高河原（沼木郷高河原）に設けられたが、桓武天皇の延暦16年（797）に湯田郷の現在地に移転した。

離宮院の機能は、大神宮の御厨すなわち大神宮の庁院と、斎王の離宮、そして度会駅家の三つの機能を合わせ持っていた官庁であった。

庁院としては、神宮領の政務を司るとともに貢租を収納していた。外城田川を下ると下稻場、稻場口、離宮山の北に稻場の小字があって、神領からの稻を収納したところと推測される。

駅家としては、弘仁8年（817）、12月の太政官符にその記述がある。字離宮前に接して「四足」の地名があり、これから駅馬、駅機関があった

と推定される。

斎王の使命は、天皇の御杖代（みつえしろ）として伊勢神宮に奉仕することであった。斎王は伊勢神宮の月次祭（6、12月）、神嘗祭（9月）の三節祭に斎宮を出発し、ここに宿泊した。三節祭の際の離宮であることにより離宮院と称される。

斎王は、それぞれの祭月の15日に斎宮をたち、先ず離宮に入れられ、禊殿でみそぎの後、内院に入られる。16日に離宮院を発たれ、度会河（宮川）でみそぎの後、外宮で奉仕し、離宮に戻られ2泊目。翌17日に五十鈴川でみそぎの後、皇大神宮で奉仕、帰られて離宮で3泊目。翌18日に斎宮へ戻られる。

大正13年（1924・12・9）官舎神社境内地と現在の離宮院公園となっている3万5千m²が国史跡に指定された。

（資料、小俣町史。「伊勢志摩を歩く」皇学館大学）ほか

官舎神社

離宮院跡地内に式内社官舎神社が鎮座する。この神社は、もと伊勢神宮大宮司家中臣氏の氏神で、古代中臣氏によって氏神祭などが行なわれてきた。「延喜式」神名帳所載、度会郡44座の一つである。官舎なる社号は、離宮院の官舎に接しているところからであるといわれている。この官舎神社も離宮院の廃絶とともにすたれていったが、寛文3年（1663）大宮司大中臣精長によって再興された。

この神社の入り口は東から百数十基の鳥居がある。この鳥居はいずれも伊勢志摩沿岸の漁夫から奉納されており、昔から大漁安全の神として信仰が厚い。

また、「旅の宮」といわれ、旅立ちをするものは必ずこの宮に寄り、道中の安全を祈った。本社を官舎神社というのは、ここに大神宮司の役所が設けられ、たくさんの官舎がたちならんでいたので、それら官舎の守護の神を祭った神社であることからこの名がおこった。

（資料、小俣町史。神宮摂末社巡拝・猿田彦神社）ほか

小俣神社

豊受大神宮の摂社。宮川左岸に鎮座する唯一の外宮の摂社。

小俣町中小俣字裏町にあり、八柱神社と並んで鎮座している。

延喜式神名帳（927）に記載のある神社。

祭神 宇迦之御魂神 小俣の田野の五穀豊穣の守護神で、稻女大明神ともいわれている。

小俣を中心とする宮川の下流一帯は、主として豊受大神宮の神主度会氏の開拓地であり、この関係から豊受大神宮の摂社に加えられたものであろう。

中世、社殿荒廃し、村人は産土神として永く守ってきた。

寛文3年（1663）に産土神の西（八王子境内）に大宮司大中臣精長が再興したものである。

殿舎 正殿 神明造板葺南面 一字

玉垣御門 猿頭門扉付 一間

玉垣 連子板打 一重

鳥居 神名造 一基

神宮司庁造替

（資料、小俣町史。神宮摂末社巡拝・猿田彦神社）ほか

八柱神社

小俣神社の隣に鎮座。創立年代不詳。

古来より、小俣村の産土神として、近世は、紀州領・鳥羽領の小俣村の氏神であった。

昔は八王子社であったが、明治4年（1871）八柱神社と改名。

祭神 天之忍穂耳命 天之菩卑命 天津日子根命 治津日子根命

熊野久須毘命 多紀理毘売命 市寸島比売命 多岐都比売命

参宮人見附

「高さ220cm、幅30cm、横は半分に割られ、一方には『永代常夜燈』と刻まれた石碑が昭和54（1979）発見され、現在、宮古橋西詰に建立されている。」

参宮人見附とは参宮人を監視検察するものである。近世宮川の渡し場は、昼夜の別なく渡船があったので、常夜燈を必要とした。

桜の渡し

伊勢参宮が盛んになる江戸時代、宮川には、3つの渡しがあった。

上流から上の渡し、下の渡し、磯の渡しと呼ばれた。今回のコースで通る渡は、下の渡しで、桜の渡しともいわれている。

（1）上の渡し・柳の渡し（川端一中島）

初瀬参宮本街道・熊野街道として大和・紀州からの参宮客で賑いました。

（2）下の渡し・桜の渡し（小俣一中河原・現宮川町）

初瀬参宮表街道として京・東国からの参宮客で賑いました。

（3）それに地元の人たちがよく利用した磯の渡しがあります。

（資料、小俣町史。伊勢の文学と歴史の散歩・中川先生著）ほか

高向神社

御園村大字高向字二ツ屋

通称上社と呼ばれている高向大社には、昔から八王子社が鎮座され、天平3年（731）に初めて祭祀されたと伝えられている。

祭神として須佐之男命（すさのおみこと）及び一族七神が祀られている。明治4年（1871）の神宮諸制度改革に際して「高向大社」と呼ばれるようになった。

この神社には、古くから「お頭神事」があり、今も古式にのっとり伝承されている。

お頭神事の起源は、古く養和年間（1181年頃）にさかのぼる。当時、高向郷では悪疫が流行し、多くの村人が命を落とした。この時、高向郷の氏寺正法寺の神童が大社・鎧社に献納された獅子頭2躯を持ち出し、村の長老や神役人を従え、村内を祓い清める舞をして歩いたところ、不思議にも今まで猛威を振るっていた悪疫は退散し、村は元の平和にもどったと言い伝えられている。この行事は、毎年2月11日に行なわれ、昭和52年（1977・5・17）に国の重要無形民俗文化財に指定された。

（資料、御園村誌。御園村制100周年パンフより）ほか

宇須乃野神社

豊受大神宮摂社

度会郡御園村大字高向字南世古

御園村高向に入ると大きな社森が二つ見える。一つは高向神社でもう一つがこの宇須乃野神社の森である。

祭神は、宇須乃女神（うすのみのかみ）で、山田原の原野の一つであるウズ野の守護神である。宇須乃女神は五穀の靈の神で神名秘書及社記には五穀靈神とある。

殿舎 正殿 神明造板葺南面 一宇

玉垣御門 猿頭門扉付 一間

玉垣 連子板打 一重

鳥居 神明造 一基

神宮司庁が造替

（資料、御園村誌。神宮摂末社巡拝・猿田彦神社。伊勢志摩を歩く・

皇学館大学）ほか

縣（あがた）神社

宇須乃野神社に御同座

豊受大神宮末社

祭神 縣神、この縣神は上田神のことと、高向の上田の守護神として祭られてきたものである。

延暦（782～806）儀式帳にその社名あり。延喜式神名帳（901～923）にその社名が記録されず。長徳検録（997）に記載あり、ユイショある古社である。

寛文3年（1663）の再興時に宇須乃野神社の域内に境内社として祭祀された。

その後、荒廃し、明治3年（1870）神社改革に際して再興、宇須乃野神社正殿内に同座合祀された。

（資料、御園村誌。神宮摂末社巡拝・猿田彦神社）ほか